校長室だより～燦燦～ №９６８

手袋

2024.2.10

自分が、こんなに手袋をするようになるとは思わなかった。手袋とは、皮の手袋である。皮の手袋に対するイメージがよくなかった。何だか、これからわるいことをしようとしているかのようである。刑事ドラマの見過ぎだろうか。

もともと、あまり手袋をするタイプではなかった。ポケットに手を突っ込むスタイルだった。奥会津の小学校では、毎朝、子どもたちを迎えに行っていた。さすがに、手袋なしでは辛かった。手袋をするようになった。皮の代物ではない。町内で本格的な皮の手袋をするのが恥ずかしかった。何だか、浮いているような気がした。スポーツのときなどに使っている手袋に落ち着いた。

高校では、毎朝、外に立って生徒たちを出迎えた。校舎が城跡の高台にあり、冬になると、厳しい寒風が吹きつける。手袋なしでは我慢ができない。ここでも、皮の手袋は不似合いのような気がした。だが、スポーツ手袋では、どうにもこうにも指先が冷たい。試しに、皮の手袋を使ってみた。劇的な改善は見られなかったが、こちらの方がいいと判断した。

今でも、毎朝、学校の入口に立っている。コートに皮の手袋というスタイルである。もう、すっかり黒の皮手袋にも慣れてきた。この手袋を使い出したときには、購入してから２０年近くが経過していた。袋に入れて、クローゼットに置いておいただけである。全く劣化していない。物がいいからだろうか。

イタリアのローマにいるときだった。イタリアといえば皮製品である。スペイン階段の近くに手袋の専門店があった。試しに行ってみた。中に入ると、手袋だらけだった。それまで、手袋をする習慣はなかったのだが、記念にと購入することにした。店員さんに手を見せた。すると、一つの手袋をもってきた。手を入れてみた。ぴったりジャストサイズだった。これが、今も愛用している黒革の手袋である。店員さんが、すごいと思った。「あなたのサイズはこれね」のようなイタリア語を話してくれた。毎日、毎日、人の手を見て手袋を扱っていると、こうなるのかと思った。達人である。

いい物は長持ちする。実は、今履いている革靴も自宅の玄関脇にあるシューズコーナーに、２０年近く眠っていたものである。もちろん、イタリアで購入したものである。こちらも、劣化しなかった。年に何度かは、ケースから出して並べてみるのだが、もったいなくて履けずにいた。ところが、何のタイミングだかは忘れたが、ようやく通常履きの革靴となった。

手袋も革靴もそうだし、今使っているバッグもそうである。いい物は、自然と大切に使おうとする。安価で中途半端な物を雑に扱うよりも、いい物と付き合っていった方がよい。だいぶ時間がかかったが、そのことに気づいた。

いい物なのだが、使えずにいる物は、まだまだある。傘もそうである。もったいないし、忘れてきそうで怖くて使えない。結局、ビニール傘を愛用している。手袋も、油断するとなくしそうである。だから、いつもコートのポケットの奥の方にしまうようにしている。今年の冬も、黒革の手袋は大活躍である。おかげで、しもやけにならずに済んでいる。これからも大事に扱いたい。